
夜行列車に乗って

柊 サラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜行列車に乗って

【Nコード】

N9908F

【作者名】

柊 サラ

【あらすじ】

主人公は、両親に内緒で夏休みにある計画を立てる。出発の朝、いつものように家事をする母親と短い会話をかわすのだが……。

目覚めは最悪だった。一応は寝たはずなのに、体が岩のように重い。

「……起きなきゃ」

自分に言い聞かせるように呟いて、習慣となった動作で制服を着ていった。大きな鞆を持って部屋を出る前に、昨夜から置いてあった麦茶を飲む。コップの中身は、お湯とたいして変わらなくなっていた。

「おはよう」

階段を下りていくと、台所で朝食を用意していた母が明るく言った。

「……おはよ」

私はやる気のない声でそれに応える。礼儀作法にうるさい母は、私が返さない限り同じ科白を繰り返し、手を尽くして言わせようとするからだ。

「何日間行くの？」

目玉焼きとトーストを出しながら、母が訊いた。目は、床に置かれた私の鞆を見ている。

「ん……十日間」

私は少々焼きすぎたトーストを頬張りながら応えた。相変わらず、母は料理が上手でない。下手とは言えないのだが、この回りが焦げた目玉焼きはどうにかならないものか……。

「そう、頑張りなさいね」

母は私に微笑みかけた。それを見ても、私の中に躊躇いが生じることはない。

「……うん」

返事をした私の思考は、既に母には向けられていなかった。

今日から、私は所属している弓道部の合宿に出かけることになっている。しかし、休みに入る前に、部活は引退していた。もちろん、母や父にも言っていない。

横目で、足元にある鞆を見た。入っているのは、お気に入りの服がたった一着と、ロープだけ。他に、物が詰まって見えるようにとありったけのタオルと、もう着られなくなった衣服が無造作に入っている。

そんなことをぼんやりと考えているうちに、母の料理は私のお腹の中に消えた。

「……ごちそうさま」

食べ終えた食器を洗い、私はほとんどが合宿には要らないもので占められた鞆を肩に掛け、玄関へと向かう。母は、大量にある洗濯物を片付けていて、見送りには来なかった。

「……行ってきます」

外に出る前に、脱衣所の方に向かってそう声をかけると、いつもと変わらない母の返事が返ってきた。

バタン。

背後で、無機質にドアの閉まる音がした。

早朝の、昇り始めた太陽が、日中の暑さの片鱗を見せている。私は駅へと向かうバスの停留所へと歩いて行った。学生なのでお金も無く、とても飛行機では行けないので、全行程が普通電車移動の貧乏旅行となる。事前に購入した切符が、しっかりと鞆にしまっていた。目指すのは、幼い頃に一度だけ旅行で行った場所。その場所以上に相応しい所は無いと思った。

ふと、私は立ち止まる。振り向くと、ついさっき出てきた家が、遙か後ろにあった。誰もいない道で、小さく言う。

「……さようなら」

私は行きます、夜行列車に乗って。

再び前を向き、私は歩き出す。雲ひとつない快晴だった。

f
i
n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908f/>

夜行列車に乗って

2010年12月10日18時35分発行